

教育委員会月報



文部科学省

Series 地方発! 我が教育委員会の取組

大分県の遠隔教育について

～県立高等学校の次世代型教育システムの構築～
大分県教育委員会

南島原市中学校部活動の地域展開

～南島原市から未来へつなぐ「南向きに生きよう!!」～
長崎県南島原市教育委員会

お知らせ

「日本の気候変動2025」を公表しました

～解説動画や都道府県別リーフレットも合わせてご活用ください～



2025年8月8日発行 第77巻8号

2025 August



Series 地方発! 我が教育委員会の取組

大分県の遠隔教育について

～県立高等学校の次世代型教育システムの構築～

大分県教育委員会 [1](#)

南島原市中学校部活動の地域展開

～南島原市から未来へつなぐ「南向きに生きよう!!」～

長崎県南島原市教育委員会 [7](#)

お知らせ

「日本の気候変動2025」を公表しました

～解説動画や都道府県別リーフレットも合わせてご活用ください～ [13](#)

大分県の遠隔教育について

～県立高等学校の次世代型教育システムの構築～

1 はじめに

大分県では、近年、少子化の進行による生徒数の急激な減少という深刻な課題に直面しています。中学校卒業生数は、平成 22 年 3 月の 11,891 人から、本年（令和 7 年）3 月には 9,740 人へと、この 15 年間で約 18% 減少しました。さらに、今後 15 年間で中学校卒業生数は 3 分の 1 以上減少し、令和 22 年 3 月には 5,969 人となる推計が出ており、減少率は 38% に達します。

【大分県内の中学校卒業生推移（平成～）】



このような生徒数の減少により、現在、多くの地域の高校で定員の確保が課題となっており、教員配置数も減少する傾向にあります。その結果、特に一部の小規模な学校では、教員数の減少により選択科目（美術や書道など）の授業を開設することが困難になったり、数学や英語などで生徒の理解度に応じた習熟度別指導が難しくなったりすることが懸念されています。

大分県教育委員会は、こうした課題に対応するため、遠隔教育などを活用して取り組んでいく考えです。

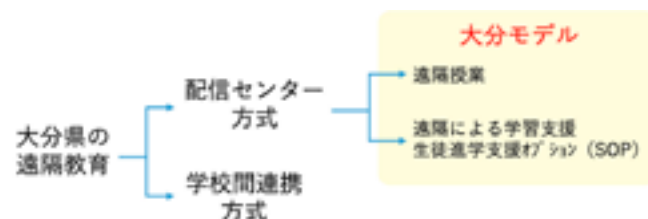
2 大分県の遠隔教育が目指す目的

大分県における遠隔教育は、今後さらに生徒が減少する時を見据え、県内どの地域に住んでいても、本県の生徒一人一人が、自分の可能性を最大限に伸ばし、多様な進路希望が実現できるよう、多様で質の高い高校教育を受けられる環境を整備することを目的としています。特に、選抜性が高い大学への進学を目指す生徒に対し、質の高い学びを提供することにも焦点を当てています。

3 大分県の遠隔教育の概要

大分県では、2 つの形態による遠隔教育を実施しています。1 つ目は、大分市内にある配信センターから地域の学校へ、双方向型の遠隔授業を配信する「配信センター方式」です。2 つ目は、専門学科の設置校から、専門科目を開設する地域の高校に、双方向型の遠隔授業を配信する「学校間連携方式」です。

さらに、「配信センター方式」の遠隔教育では、「遠隔授業」と「遠隔による学習支援（SOP）」という 2 つの側面からなる「大分モデル」を展開しています。単に授



業を実施するだけでなく、生徒一人ひとりの進路希望に寄り添った学習支援を、ICTの力によって実現する仕組みです。

4

配信センター方式による大分モデル ～「遠隔授業」と「学習支援(SOP)」～

(1) 遠隔教育配信センターの設置

配信センター方式の中核を担うのが、大分市の大分上野丘高校の敷地内に、令和7年4月1日に開所した「大分県教育庁遠隔教育配信センター」です。このセンターは、延床面積319.5㎡の施設で、防音・吸音機能を備えた専用配信スタジオ（配信室）が8室整備されています。センターには専任の教員が常駐しており、授業の配信だけでなく、生徒の学習支援や進路相談といった伴走型の支援も行っています。令和7年度は、専任教員9名と職員3名の体制で運営されています。



【配信室】



【執務室】

(2) 配信センター方式による遠隔授業

配信センター方式の遠隔授業は、以下の基本方針に基づいて実施しています。

①実施方法

遠隔教育配信センターから2校を対象に、同時双方向型の授業を配信。1校あたりおおむね10名程度の生徒が参加。

②対象校

普通科を設置する地域の高等学校を中心に、段階的に導入。令和7年度（2025年度）は4校で先行実施し、令和8年度（2026年度）には新たに8校、

令和9年度（2027年度）にはさらに5校が加わる予定。これにより、令和9年度までに合計17校が遠隔授業の受信校となる計画。

③対象学年

原則、選抜性の高い大学等を志望する2・3年生のうち、まずは理系を選択した2年生を対象に授業を実施。導入2年目以降は、2・3年生の両学年で実施。令和7年度は、4校から計42名の生徒が参加。

④配信教科

数学（数学B・C）、英語（英語コミュニケーションⅡ・Ⅲ）、理科（物理・化学）を対象。理科（物理・化学）は、各校において導入2年目以降に、3年生を対象に数学、英語に加えて実施します。

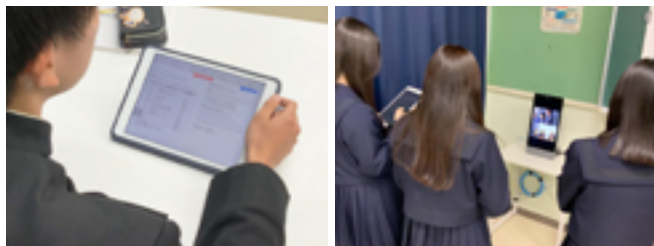
⑤授業実施状況

現在各校で行われている学習習熟度別指導より高いレベル（選抜性の高い大学等を志望する生徒向け）の授業を実施。配信センターの専任教員がセンターから各受信校へ授業をライブ（リアルタイム）で配信します。受信校の教室には大型モニターが2台設置されており、教員がほぼ等身大で表示されるため、対面授業に近い臨場感が得られ、生徒は集中して意欲的に学習に取り組むことができます。また、生徒の学習状況を把握するために、学習支援アプリケーション「MetaMoji」、机間指導支援アバター「temi」などのICT機器を活用しています。MetaMojiを利用することで、生徒がスタイルペンなどで考えや問題の答えをどのように書きこんでいるのかなど、生徒の1人1台端末上での学習状況をリアルタイムで教員が把握することができます。さらに、temiを活用することで、教員が生徒の近くで取り組みの様子を観察したり、生徒が教員に質問したりするなど、個別の学習の進捗や変化を的確に捉えることが可能です。加えて、受信校の教室に設置されている拡張カメラ機器「NeatFrame」（3台）を通じて、ペア校の生徒と議論し、意見交換や発表・質疑応答を行うことで、学校の枠を超えてお互いを高め合う、協働的な学び

の環境が生まれています。NeatFrameは、優れた集音性能とノイズ除去機能、AIによる顔認識や表情のクローズアップ表示が可能で、生徒同士の円滑なコミュニケーションに寄与しています。生徒からは「普段の授業と変わらず違和感がない」「イヤホンで聞くよりも音が良い」といった肯定的な感想も聞かれています。配信センター方式の遠隔授業に参加した生徒からは、「他校の人たちと一緒に授業を受けることは今までになく、新鮮だと感じました」、「レベルの高い授業を受けられることは、自分にとって大きな学びがあり、良い経験になっています」、「授業を通してさまざまな人と関わることができ、自分の意見を発信しながら他の人の考えを吸収したいと思いました」といった前向きな声が寄せられています。



【受信校（2校合同遠隔授業_英語）】



【学習支援アプリケーション】

【2校間でのディスカッション】

(3) 配信センター方式による遠隔学習支援 ～ 生徒進学支援オプション(SOP)～

大分モデルのもう一つの柱は、「遠隔による学習支援(SOP)」です。SOPとは「生徒進学支援オプション」

のことで、遠隔授業に加えて生徒に対するきめ細やかな学習支援を行い、学習効果や学習意欲の向上を図ることを目的としています。生徒は自身の進路希望や学習状況に応じて、必要な支援を自ら選択して取り組むことができます。SOPには以下の6種類があり、対象となる生徒によって受講可能な支援が異なります。



①大分県内すべての普通科等設置校（28校）の生徒 が受講できるもの

(ア) SOP1：長期休業中の特別授業

大学進学を希望する高校2年生を対象に、夏・冬・春の長期休業中に実施される特別授業です。大学を志望する生徒向けに、ライブ配信とアーカイブ配信を組み合わせ提供。令和7年度は、夏季特別授業として、難易度別に2グレードの英語と数学を5日間にわたり実施する予定。

(イ) SOP2：オンデマンドによる動画教材配信 A (大学入試問題等解説動画)

大学の個別学力検査（2次試験）の解説動画を配信。配信センターの専任教員が過去の良問を厳選し、大学入試に必要とされる力や典型問題の解法を分かりやすく解説します。

- ・ 英語：語彙、英訳・和訳、要約などに関する基礎力の確認と体系的な学習を目的とした動画教材を配信
 - ・ 数学：重要問題を中心に、初見問題への対応力や、完答に必要な力をどのように養うかを解説
 - ・ 物理：「運動」「電磁気」「波」「気体分子」の4分野から、頻出分野の公式・法則、立式のポイントなどを解説
 - ・ 化学：理論化学や有機化合物を中心に、既存知識の活用法やリード文の読解ポイントなどを解説
- 年間約25本の動画を配信予定で、対象は県内の普

通科等設置校に在籍する3年生（2年生でも受講可）。

②「配信センター方式」による遠隔授業を受講している生徒のみが対象となるもの

(ウ) SOP2：オンデマンドによる動画教材配信 B (授業録画データ)

遠隔授業のアーカイブ動画をオンデマンドで配信。授業内容の復習を目的としており、原則として自宅での視聴を想定（倍速視聴可）。年間を通じて実施される全教科の遠隔授業が対象。



【授業録画データ】

(エ) SOP3：1対1生徒個別指導

平日放課後や長期休業中に、配信センターから遠隔で1対1の個別指導（（個人）添削指導など）を実施。大学入試問題や各種演習問題の解説。

(オ) SOP4：オンライン課題

学習支援アプリ（MetaMoji や Microsoft Teams など）を活用し、授業内容の定着を図る補充問題や発展的な課題を配信。提出・集約・フィードバックを含む「平日課題」および「週末課題」を実施。

(カ) SOP5：動機付け・意識改革

大学教授や、地域の高校から高い志を持って進路目標を達成した先輩による講話・ワークショップをZoom等で実施します。合格への意識づけや、ロールモデルからの学びの機会として、遠隔授業に参加している高校の生徒が合同で参加するイベントを、年に数回、平日放課後に開催。

(キ) SOP6：オンライン面談

配信センターの専任教員と生徒がオンラインで、教科内容に特化した個別面談を実施。授業中の疑問点の解決や、学習内容の個別相談などを行う。学期に1回、夏期・冬期休業中に各1回、年間計5回の実施を予定。

これらのSOPは、令和7年4月から開始された遠隔授業と連動して実施され、「大分モデル」における学習支援の柱として展開されています。

5 学校間連携方式による遠隔教育

大分県の遠隔教育には、もう一つの形態として「学校間連携方式」があります。この方式は、文部科学省の「CORE ハイスクール・ネットワーク構想事業」の指定を受け、令和3年度（2021年度）に開始されました。令和6年度からは、文部科学省の「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業」の指定を受け、引き続き実施されています。



【受信校（学校間連携方式_農業・測量）】

学校間連携方式では、遠隔教育配信センターが全体の取りまとめや調整等を担い、主に専門科目を実施する学校が配信校となります。そこから、地域の受信校へ多様な科目の遠隔授業が配信されており、受信校の教育の特色づくりに大きく貢献しています。例えば、大分南高校から中津南高校耶馬溪校に対して、福祉科目「こころとからだの理解」が、また情報科学高校から国東高校に対して、商業科目「プログラミング」が配信されています。この方式により、専門分野の教員が配置されていない学校でも、生徒がその分野の学びに触れることが可能となり、教育機会の均等化や生徒の多様な進路希望への対応が図られています。

6

テクノロジーの活用と 探究的な学びへの可能性

大分県の遠隔教育では、先進的なテクノロジーを積極的に活用しています。前述の大型モニターやアバター、拡張カメラ機器に加え、配信システムには Zoom Rooms を採用し、生徒には 1 人 1 台端末等 (iPad+MetaMojji) が配布されています。これらの技術により、生徒からは「まるで同じ教室にいるような感覚で授業を受けられる」といった感想をいただいています。

また、遠隔教育だからこそ実現できる探究的な学びの可能性も広がっています。探究的な学びでは、専門家との出会いが非常に重要ですが、遠隔教育を活用することで、遠隔地の学校でも多様な分野の専門家と容易に交流することが可能となります。大分県では、県内の立命館アジア太平洋大学 (APU) や、アメリカのスタンフォード大学と連携し、一部の生徒を対象に遠隔による特別講座なども実施しています。

さらに、遠隔教育は、生徒同士の情報共有を促進するうえでも有効です。2 校合同で行う授業では、他校の生徒とともに学ぶことができ、お互いを高め合う新たな

学びの環境が生まれています。他校の生徒とのやり取りを通じて、生徒が新たな発見や気づきを得ることも期待されます。このように、生徒同士がつながる仕組みは、探究的な学びにおいても非常に重要な要素となっています。

大分県の一部の高校では国外の学校と連携し、遠隔で探究的な学びを展開する取り組みを進めています。異なる文化的背景を持つ生徒が、国境を越えて同じチームで学び合い、議論を交わすことは、遠隔教育ならではの大きな強みといえるでしょう。

7

今後の展望と大分モデルの意義

大分県の遠隔教育は、今後、段階的に拡大されていく予定です。配信センター方式による遠隔授業は、令和 9 年度までに県内の地域にある普通科設置校 17 校への導入が計画されています。大分県の遠隔教育は、将来的な生徒数の減少に備え、地域の学校環境を整えるための取り組みとして位置づけられています。これは、人口減少を見据え、教育の質と多様な学びを維持・向上させるための「未来への投資」ともいえるものです。

大分モデルの特徴は、遠隔授業に加えて、生徒進学支援オプション (SOP) による遠隔での学習支援がパッケージ化されている点にあります。これにより、生徒は授業に加えて、個別の学習支援や進路指導を一貫して遠隔で受けることが可能となります。

大分県の遠隔教育の取り組みは、地域課題の解決にとどまらず、地理的制約を超えた学校間連携や、国際的な視野を持った教育の実現にもつながっています。これは、人口減少が進む日本社会において、教育の新たな姿を提示する重要な一歩であり、生徒一人ひとりがより最適な学習環境で学べる未来を切り開くカギとなると確信しています。

8 おわりに

大分県が遠隔教育配信センターを設置し、遠隔教育「大分モデル」の本格運用を開始できたのは、ひとえに関係各位のご理解とご協力の賜物であり、心より感謝申し上げます。遠隔教育は、すぐに目に見える大きな成果が得られるものばかりではないかもしれません。しかし、5年後、10年後に「生徒のために取り組んでよかった」と心から思えるような、新たな教育のスタンダードを、皆様とともに築いていきたいと考えております。

また、他の教育委員会の皆様におかれましても、本県の取り組みが、それぞれの地域が抱える課題に対して遠隔教育が有効な手段の一つとなり得ることを示す事例となれば幸いです。今後とも関係する皆様と力を合わせ、県内どの地域においても、多様で質の高い高校教育を保障する「未来志向の教育」の実現を目指してまいります。

問い合わせ先

大分県教育庁 遠隔教育配信センター

電 話 097-510-9108

メール oitatec@oen.ed.jp

ホームページ <https://oitatele.com/>

担当：釘宮



南島原市中学校部活動の地域展開

～南島原市から未来へつなぐ「南向きに生きよう!!」～

1 はじめに

(1) 【令和8年度中の平日も含めた完全地域展開を実現させるために】

児童生徒の「やりたい!」「チャレンジしたい!」を応援できる環境をつくるためには?

子どもも大人も夢中になってスポーツや文化活動に親しみ、生涯にわたって豊かなスポーツ・文化ライフを送るきっかけをつくるためには?

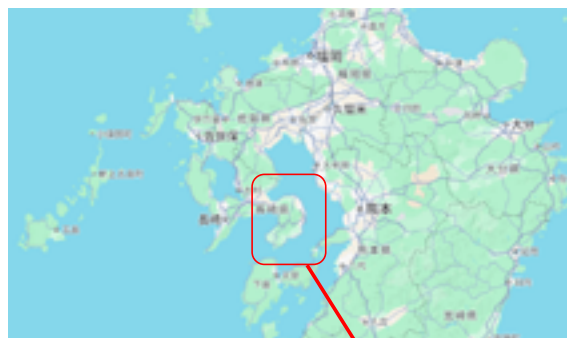
南島原市における中学校部活動の地域展開の目的は次のとおりです。

- 児童生徒が「生涯にわたって豊かなスポーツ・文化ライフ」を送るきっかけとなる地域クラブを運営及び支援する。
- 児童生徒の「やりたい」を支援する。
- 児童生徒の「健全育成」と「人間力向上」を第一に考え、支援する。
- 保護者にとって「南島原市に住みたい」と思える魅力を作る。
- 学校・地域の大人が「子どもと向き合える南島原市」にし、「地域総ぐるみで子どもを育てる場」とする。
- 学校・地域の大人が「自分がやりたいスポーツ・文化活動」に関わることができる制度を作り、特技を最大限に生かせるための支援をする。

中学生だけでなく、小学生にとっても教職員を含めた地域の大人にとってもプラスとなるよう、南島原市の魅力の一つとなることを目指して取り組んでいます。

(2) 【南島原市の特徴】

南島原市は人口約40,000人で、長崎県の南部、島原半島の南東部に位置し、有明海と雲仙普賢岳の豊かな自然に囲まれた市です。



【図1 南島原市】

歴史をさかのぼれば、1560年代にキリスト教が伝来し、キリシタン文化が繁栄した時代もあった一方、弾圧を受けた時代もありました。「島原・天草一揆」の終焉の地としても有名です。

その中でも、「原城跡」は、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の構成資産の一つとして世界文化遺産に登録されています。

南島原市には、主要道路の国道251号線沿いに東西40kmに小学校15校（分校2校含む）中学校8校、公立高校2校があります。令和7年度の児童数1,738名、生徒数966名ですが、今後6年間、毎年100人程度減少していく見込みです。

本市にとって、部活動の地域展開は、これまでにない新たな価値を創造し、地域を活性化させる最大のチャンスと捉えています。教育委員会がゴールや方向性を明確にして主導し、たとえ地域展開するにあたり困難な点があったとしても、それを克服することが、スポーツ・文化活動に育まれてきた私たち大人の役割でもあると考えています。

2 地域展開は難しい？

本市では、令和5年度に中学校部活動在り方検討委員会を設立し、令和6年度末までに7回開催してきました。令和5年度に地域クラブを支援するための制度を策定し、令和6年度に地域クラブ活動に関する方針を策定しました。令和7年度は「南島原市地域クラブサポートセンター」を7月に設立し、更なる取組を推進していきたいと考えています。

長崎県内の部活動の地域展開は、各自治体の進捗状況をみても、異なり、それぞれの自治体が抱える課題があります。

本市において地域展開を推進するにあたり、何が障壁となっているのかを検証し、子どもを「ど真ん中」に置き、多面的・多角的視野で、議論を行う必要があると考えます。

(1) 打開策1「枠組みを作る」

本市では地域展開を推進していくにあたり、アンケートや部活動在り方検討委員会の意見をもとに以下の制度を創設しました。

①南島原市地域クラブ認定制度

教育委員会で認定要件を満たしたクラブを「地域クラブ」として認定し、各種支援を行う制度です。

※以下、認定要件の一部抜粋

- 実施の運営主体は、総合型地域スポーツクラブ（本市ではTEAMひまわり、アザリーベンススポーツクラブが運営に携わる）・スポーツ協会型（各協会が運営に携わる）・学校クラブ型（南島原市地域クラブサポートセンターが運営に携わる）であること。
- 実施対象は、原則、南島原市内を活動拠点とする地域クラブに所属する児童生徒で構成され、日常的に会員全員が活動をできる地域クラブであり、実施主体は、地域クラブとすること。
- 南島原市教育委員会が主催する指導者研修を受講し、南島原市教育委員会に指導者（南島原市スポーツ・文化活動指導者^{じんざい}人才リスト）として登録されている指導者が運営に携わること。
- 認定地域クラブとして認定を受けた団体は、南島原市地域クラブサポートセンターの会員又は準会員となることを了承すること。

②南島原市立中学校拠点校部活動実施要項

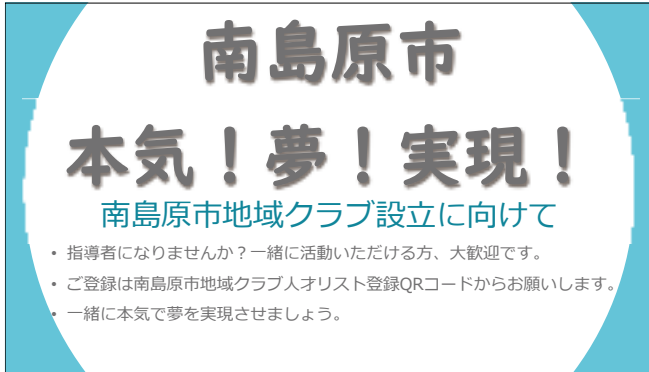
市校長会と協議して策定しました。令和7年度4つの部活動で実施しています。

③南島原市部活動地域移行推進事業及び Growsport 南島原（行政連携事業）による地域クラブ設立及び生徒移送サービス

地域クラブ会員および拠点校部活動部員の平日の活動拠点までの移送を、総合型地域スポーツクラブが所有するマイクロバスを活用したサービス事業（無料）として実施しています。現在、拠点校部活動で36名、地域クラブ活動で約200名が利用しています。

④南島原市地域クラブ指導者等^{じんざい}人才リスト

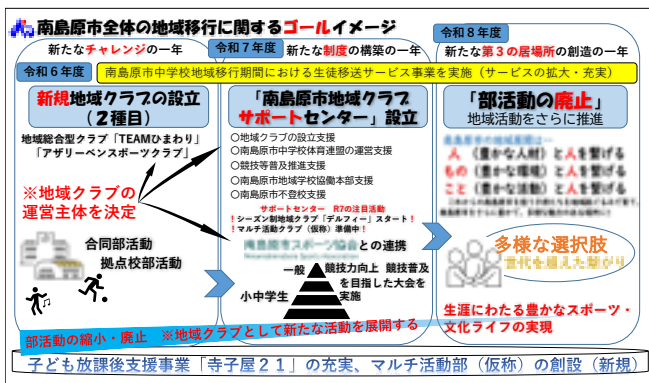
指導者の確保のために、本市独自に人才リストを作成しました。「才」の字は登録者の才能を子どもたちのために生かしてほしいという意味を込めています。



【図2 人才リスト登録案内】



【図3 人才リスト登録案内】



【図4 地域展開ロードマップ】

⑤南島原市中学校社会体育・文化活動補助金交付要

人才リストに登録された指導者が運営する認定地域クラブに対して市が地域クラブ運営支援として補助金を交付しています。

⑥南島原市総合型地域スポーツクラブ支援補助金交付要綱

移送サービスを実施している総合型地域スポーツクラブに対して、移送サービス運営支援として補助金を交付しています。この補助金はスポーツ安全協会「スポーツ活動等普及奨励助成事業」により実現しています。

⑦南島原市地域クラブ活動方針の策定

本市では、国、県が示す方針をもとに地域の指導者目線に立った方針を策定するために、部活動在り方検討委員会で検討を行い、策定しました。

⑧南島原市地域クラブサポートセンターの設立と事業内容の整理（令和7年7月設立）

※4で詳細を説明

(2) 打開策2「どんな意見も具現化」

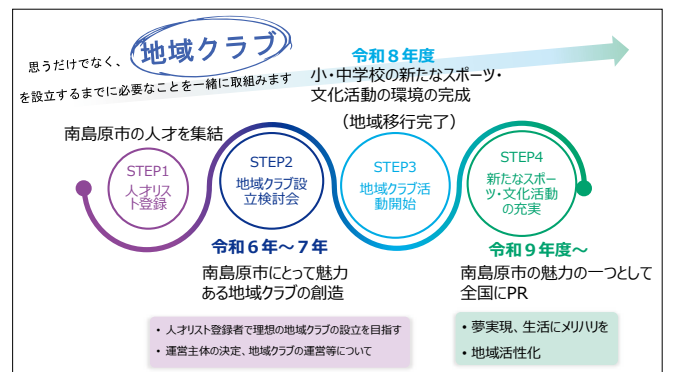
「意見を聞く」「まず具現化するための制度を作る」ことで改善すべき点が明らかになり、新たな意見が生まれてきます。それをさらに改善していきます。

「ベストよりもベター」を基本にしています。批判や否定的な意見の中にこそ、本来、取り組むべきことのヒントが隠れていると考えます。最も大切なことは「難しい」の一言で片づけるのではなく、「やってみよう」と前に進むことです。

そして、社会の変化に対応するためにスピード感を持って取り組む必要があります。

(3) 打開策3「教育委員会が主導する」

地域展開は、ただ部活動の受け皿となるクラブを設置し、地域クラブに任せるだけではうまくいきません。



【図5 地域展開ロードマップ2】

教育委員会が「まちづくり」の視点を持ち、明確な方針を示し、様々な団体との協議を経て施策等を実行することで成功すると考えています。

本市では学校教育課と生涯学習課が中心となり、首長部局や関連部署及び本市校長会と細やかな情報交換と意見交換を交わすことが学校と教育行政、行政の担当課を超えた横の連携の強化につながっています。

南島原市は丸となって子どもたちのために地域展開の推進を行っています。

3 周知活動の重要性

(1) 周知活動は「誰に」「何を」「いつまでに」「どのようにして」を明確に

市民を対象に地域展開の説明会を昨年7月に開催し、

中学校部活動の地域移行説明会 **開催**

① **南島原市から未来へつなぐ「南向きに生きよう！」**
児童生徒がやりたいことにチャレンジできる環境を！
誰もが無理なくスポーツや文化活動に親しみ、続けることができるように、南島原市は令和8年度の完全移行を目標に、部活動から地域クラブへ移行します。

期 日：令和6年7月12日(金)

会 場：ありえコレジヨホール(大ホール)

参加対象：学校教職員、中学校部活動外部指導者、保護者等
※興味のある方はどなたでも参加できます。

内容：南島原市推進計画説明「これからの中学校部活動について」

① 地域移行とは？(部活動のこれから)
② 南島原市地域クラブについて
③ 南島原市拠点校部活動について
④ 地域移行ロードマップについて

スケジュール

受付	18:30~19:00
開会	19:00~19:10
南島原市の説明	19:10~20:00
質疑応答	20:00~20:20
閉会	20:20~20:30

7月10日締め切り
お申し込みはこちら

主催：南島原市教育委員会
(お問合せ) 電話 0957-73-6702

【図6 市内説明会案内チラシ】

様々な団体から140名ほど参加がありました。

他にも、市スポーツ協会、競技団体、市PTA連合会、学校関係者、保護者、地域関係団体に対して、ありとあらゆる機会を設けて説明会を実施すると同時に、意見の集約を行っています。明確な方針を示すことが、学校関係者や保護者に安心感を与えることにつながっています。

(2) 「繰り返す」ことの必要性

地域展開を理解してもらい、協力を得るには、あらゆる手段を使って(広報紙、HP、SNS、説明会等)説明を繰り返すことが重要です。その中で、最も効果的な周知方法は、「何度も足を運び意見を交わす」ことです。

(3) マイナスのイメージをプラスに変える

部活動の地域展開は、様々な課題ばかりがクローズアップされていると感じます。学校も部活動がなくなること「どんな変化があるのか」想像ができず、子どもも大人も不安を抱えている状況です。

本市では教職員を対象にしたアンケートの中で「地域移行すべき」70%、「条件が整えば移行すべき」28%と、ほとんどの教職員が「地域展開」を望んでいると推察できます。説明の中で子どもや保護者、地域にとってどんなメリットがあるか、具体的な制度、スケジュールを示していくことが説明内容に説得力を持たせることになります。

南島原市の未来を自分たちのアイデアと行動で作ることを、関わる大人がワクワクしながら取り組んでいくことが地域展開を大きく推し進める力になると考えます。

(4) 聞こえてきた声

説明会を実施していくうちに、関係者からのマイナスな意見は減少してきました。同時に様々な団体が興味を持ち、「地域のために何かできることをしたい」と説明会開催の要望が増えてきました。学校関係者だけでなく、地域の人たちに当事者意識が芽生えてきたと感じています。

4

南島原市地域クラブサポートセンターの設立

(1) 設立の目的

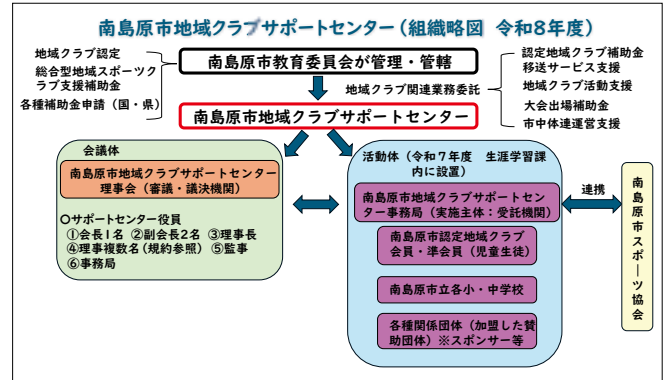
この団体は、市民一人一人が本市教育の目的である「幸せで悔いのない人生を歩むための“善き人格”を育む」ための事業を行うとともに、南島原市の新たな地域クラブ活動の運営補助及び関係団体の支援、不登校児童生徒の支援を行い、部活動に変わる新たなスポーツ・文化環境づくりに寄与することを目的としています。

(2) 統括組織としての二つの機能

- ①「会議体」として、関係団体を結び付け、理事会を通して、学校との連携を強化することを目的としています。
- ②「活動体」として、地域クラブ運営主体としての活動はもちろんのこと、将来的には、以下の6つの事業を展開し、本市の子どもたちを支援していくことを目的としています。

【南島原市地域クラブサポートセンター
主要業務内容】について

- 南島原市立各小・中学生地域スポーツ・文化クラブ活動の運営及び活動支援
 - 南島原市中学校体育連盟の運営支援
 - 競技等普及推進活動支援
 - 南島原市地域学校協働本部支援
 - 南島原市立各小・中学校不登校支援
 - その他この団体の目的を達成するために必要な活動に対する支援は準会員となることを了承すること。
- ※南島原市地域クラブサポートセンター規約から抜粋



【図7 サポートセンター組織図】

(3) 総括コーディネーターの配置

地域展開を推進するには、各団体を取りまとめ、方向性を示す人材が重要です。サポートセンター内にコーディネーターを配置することで、窓口が一本化され、より具体的な施策を講じることにつながります。

(4) 新たな事業の創造

○シーズン制地域クラブを設立

「デルフィーノ・マリクラブ」

実施日	活動場所	活動時間	活動内容
第1回 7月29日（火）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	マリンスポーツ入門編
第2回 7月31日（木）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	SUPの基礎を学ぶ
第3回 8月 5日（火）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	カヌーの基礎を学ぶ
第4回 8月 7日（木）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	SUPテラニック編
第5回 8月12日（火）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	カヌーテラニック編
第6回 8月16日（火）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	SUP&SUPヨット編
第7回 8月26日（火）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	ヨットスラッシュボード編
第8回 8月28日（木）	加津佐前浜海水浴場	10:00～12:00	カヌー競技体験編
第9回 8月30日（土）	場所未定～鹿児島県鹿児島市		鹿児島県カヌー体験
第10回 9月 6日（土）	※別途、案内にのぞいていただきます。		ヨニバーサルビーチ体験

【図8 募集案内チラシ】

令和7年度新たな取組として、地域の豊かな自然環境を生かし、南島原市 B&G 海洋センターと連携したシーズン制地域クラブを実施します。

全10回のプログラムを綿密に組み立て、豊かな体験活動となるよう構成しています。

長島海峡（熊本県牛深から鹿児島県長島の海峡8km）カヌー横断大会への参加や、最後の活動ではユニバーサルビーチ※体験会を企画し、障がいの有無に関係のない活動を実施する予定です。

※身体に障がいのある人やお年寄りであっても、自由に、安全に、快適に活動できるビーチ

5 成果と今後の展望

(1) 成果

部活動を廃止し、平日も含めた完全地域展開がスタートしている種目

- ①サッカー競技（令和6年度4月から開始）
- ②バドミントン競技（令和7年4月から開始）
- ③硬式テニス競技（令和6年7月から開始）

部活動の受け皿として、平日も含めた完全地域展開がスタートしている種目

- ①女子バレー競技（令和6年7月から開始）
- ②軟式野球競技（令和6年9月から開始）
- ③吹奏楽（令和7年4月から開始）
- ④合唱（令和7年4月から開始）
- ⑤男子バレー競技（令和6年度設立。令和7年8月から開始予定）
- ⑥柔道競技（令和7年度中に設立。令和8年度4月から開始予定）

※バドミントン、硬式テニス競技、合唱はこれまで本市に部活動がなかった競技です。また、文化部も含めて地域クラブが設立され、地域展開の準備を整えています。

(2) 今後の展望

- ①児童生徒の移動方法の充実のためにスクールバス活用の検討

- ②指導者の確保と質の向上のための研修等の体制整備
- ③南島原市地域クラブサポートセンターに係る制度や業務マニュアル、体制整備
- ④小中連携した地域クラブの設立
- ⑤小中カテゴリー大会（県大会の予選会として）の企画・運営

地域展開を推進していく中で、学校だけでなく、地域が抱える諸問題も浮き彫りになってきました。前述したこれから取り組んでいく事項に対して、一つ一つスピーディーに対応していくことが求められます。

そのことが将来的な「まちづくり」につなぐ故郷を愛し、地元の発展に貢献できる大人へと成長することに必ずつながっていくものと考えます。

この地域展開を大きなチャンスと捉え、さらなる充実を図っていき、本市の魅力を最大限に発信していきます。

6 おわりに

最後に、本市の地域展開のコンセプトをご紹介します。

「子どもが自分で考え、選び、活動する」

「教師も子どもも親も選べる環境」

「学校（職場）・家庭（地域）＋

新たな第3の居場所づくり」

南島原市の地域展開は…

**人（豊かな人材）と人を繋げる
もの（豊かな環境）と人を繋げる
こと（豊かな活動）と人を繋げる**

これからの南島原市を担う子供たちを地域総ぐるみで育て、南島原市をさらに豊かで、多様な魅力のある場所に！！

【図9 社会教育指導員説明会資料から】

「日本の気候変動2025」を公表しました ～解説動画や都道府県別リーフレットも合わせてご活用ください～

研究開発局 環境エネルギー課

近年、気温の上昇や大雨の増加等、地球温暖化による様々な影響（気候変動）が各地域でみられており、今後地球温暖化が進行するにつれて更に深刻化していくことが懸念されています。我が国においても、例えば令和6年9月の石川県能登における大雨について、地球温暖化によって総降水量が増加する等の影響を受けていたことが示唆されています。

このような状況において、文部科学省及び気象庁は、気候変動に関する最新の科学的知見を総合的に取りまとめ、令和7年3月に「日本の気候変動 2025—大気と陸・海洋に関する観測・予測評価報告書—」（以下「日本の気候変動 2025」という。）を公表しました（<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/index.html>）。

「日本の気候変動 2025」は、平成 30 年度から気象庁と合同で開催している「気候変動に関する懇談会」及び同懇談会の下「評価検討部会」の助言を受け、令和2年 12 月に公表した「日本の気候変動 2020」に新たな科学的知見と観測データを反映し、国や地方公共団体、事業者等における気候変動対策の効果的な推進のための基礎資料として、日本における気候変動の観測結果と将来予測を取りまとめた報告書です。日本の気候変動に関する基本事項を網羅した「本編」、より専門的に詳しく記載された「詳細編」、特に重要な事項をコンパクトにまとめた「概要版」から構成されています。概要版と本編では、専門的な表現はできる限り使わず、簡潔な表現となるよう工夫をしておりますので、気候変動について知る



「日本の気候変動 2025」の将来予測まとめ

資料：文部科学省、気象庁作成「日本の気候変動 2025」概要版 25 ページ

きっかけとして、ぜひご利用ください。

「日本の気候変動 2025」では、日本における気候変動について、温室効果ガス、気温、降水、台風などの熱帯低気圧、海水温といった様々な要素ごとに、観測結果と将来予測を掲載しています。観測結果については、これまでに得られている観測データ等を基にした長期間の変化傾向を中心に、その背景要因なども交えて解説しています。将来予測については、将来における地球温暖化の進行の程度に応じて、二通りの予測を掲載しています。一つは「パリ協定の2℃目標が達成された世界（2℃上昇シナリオ）」を想定した予測、もう一つは「追加的な緩和策を取らなかった世界（4℃上昇シナリオ）」を想定した予測です。これらの二通りの想定において、様々な要素に将来予測される変化について掲載しています。

さらに、より使いやすく充実した内容となるよう、都道府県別リーフレットに加え、今回の報告書には、「日本の気候変動 2020」にはなかった新たな予測情報等を追加したほか、報告書の内容を解説する動画を公表しました。以下で詳しくご紹介します。

● 極端な大雨や高温の将来予測に関する情報

近年は国内各地で大雨による災害が発生しており、これまでに得られている観測データからは、1時間雨量 80 mm 以上などの強い雨の発生頻度が 1980 年頃と比較して2倍程度に増えているといった評価が得られています。また、冒頭で述べた令和6年9月の石川県能登における大雨のような、過去に災害をもたらしたいくつかの大雨について、地球温暖化によって総降水量が増加する等の影響を受けていた可能性が示唆されています。

「日本の気候変動 2025」では、地球温暖化の進行に伴うこうした極端な大雨や高温の発生頻度や強度の変化について、新たに掲載しています。ここでは、極端な大雨の将来予測についてご紹介します。極端な大雨については、気温が高くなることにより大気が水蒸気をより多く含むことができるようになるため、一度にもたらされる降水量が多くなると考えられており、工業化以前の気候で 100 年に一回の頻度で発生するような稀な大雨は、地球温暖化が進

み世界平均気温が 2℃ 上昇した世界では 100 年に約 2.8 回の頻度で発生すると予測されています。また、世界平均気温が 4℃ 上昇した世界では更に頻度が増えて、100 年に約 5.3 回となると予測されています。

また、地球温暖化が進行した将来の気候において 100 年に一回の頻度で発生するような大雨は、従来の気候において同程度の頻度で発生していたものより強い雨になると予測されています。具体的には、世界平均気温が工業化以前より 2℃ 上昇した世界及び 4℃ 上昇した世界では、100 年に一回の頻度で発生する大雨の降水量はそれぞれ、約 17% 及び約 32% 増加すると予測されています（いずれも日本国内の平均値）。

現在までの「100 年に一回の大雨」となる日降水量については、全国約 1,000 地点の過去の観測データから算出した結果を、「日本の気候変動 2025」詳細編及び気象庁ウェブサイト (<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/riskmap/index.html>) からご覧いただけます。



100 年に一回の極端な大雨の発生頻度と強度の変化

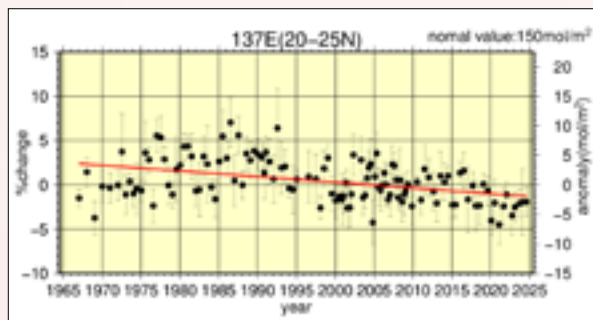
資料：文部科学省、気象庁作成「日本の気候変動 2025」本編 41 ページ

これらの情報については、今後の極端な大雨の増加を考慮した避難計画の策定や学校施設の水害対策、高温の発生頻度や強度の増加を踏まえた学校行事計画や熱中症対策の検討等において活用されることを期待しています。特に、極端な大雨についての情報に関しては、大雨による災害への備えといった防災面における気候変動対策にとって重要な情報であり、ぜひ効果的に利用していただきたいと考えています。

● 海洋の溶存酸素に関する情報

海水中に溶け込んでいる酸素の量（溶存酸素量）の減少は世界の多くの海域で観測されており、「貧酸素化」と呼ばれています。酸素はほとんどの海洋生物にとって生存に必要不可欠であるため、貧酸素化の進行による海洋生態系への影響が懸念されています。

「日本の気候変動 2025」では、新たに日本南方海域の海洋中の溶存酸素量の長期変化傾向を掲載しています。これまで実施してきた海洋観測で得られたデータを用いて日本南方海域における溶存酸素量の状況を調査した結果として、1967年から2024年の間に3.6%減少していることが明らかになりました。また、将来においても、2℃上昇シナリオ及び4℃上昇シナリオの両方で、減少し続けると予測されています。



北西太平洋亜熱帯域における海洋中
（深度0～1,000m）の平均溶存酸素量の総量の変化

1991～2020年を基準とした北西太平洋亜熱帯域（東経137度、北緯20～25度平均）における溶存酸素量（深度0～1,000m）の変化率。右軸は基準値（右上の値：150mol/m²）に対する偏差、それぞれの値の幅は緯度平均した際の標準偏差、赤線は気象庁東経137度定線観測開始以降の全期間（1967～2024年）での長期変化傾向を表す。

資料：文部科学省、気象庁作成「日本の気候変動 2025」
詳細編 288 ページ

● 解説動画や都道府県別の情報等

「日本の気候変動 2025」では、より多くの方々に気候変動を身近なものとして知っていただくための入門資料として、報告書の他に解説動画（<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/movie/>）と都道府県別リーフレット（https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/gw_portal/region_climate_change.html）を用意しました。

解説動画では、概要版の内容を各5分程度の対話形式で説明しており、動画で学べる資料としてご活用いただけます。都道府県別リーフレットでは、各都道府県等における気候変動の観測結果及び将来予測に関する情報を取りまとめた掲載しています。地域の気候変動について関心を持たせるきっかけとしてご活用ください。

また、報告書に掲載した図表類及びその元となるデータは、気象庁ウェブサイト（https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/ccj/2025/sozai/sozai_index.html）で提供しています。

こうした一連の資料についても、気候変動対策や気候変動に関する普及啓発や教育活動において一層ご活用いただきたいと思います。



都道府県別リーフレット

資料：文部科学省、気象庁作成「日本の気候変動 2025」
概要版 2 ページ

「夏休み」

夏休み。多くの小学生にとって一番楽しい期間ではないだろうか。もう20年近く経つが、私も小学生だったときは夏休みが楽しくてしょうがなかった。小学生時代を北海道で過ごした私にとって、短い夏は特別だった。毎日眠たい目をこすりラジオ体操に行く。友達と公園で野球やサッカーをし、お昼は祖母のゆでたそうめんをすする。おやつの時間は祖父母が家庭菜園で育てた真っ赤なスイカにかぶりつき、アニメの再放送を見る。夕飯後は、普段より少し夜更かし。楽しい夏はあっという間に過ぎ去った。

地元ではお盆明けに花火大会が行われる。毎年、父母と花火大会に行くのが夏一番の楽しみだった。その頃の夜は正直肌寒い。暖かいお茶を飲みながら目を輝かせた、夜空一面に咲いた光の花を忘れることはないだろう。長袖必須の花火大会は、まさしく夏のクライマックスだった。短い北海道の夏がすぐ終わってしまうように、夏休みもあっという間に終わってしまった。当時通っていた小学校では夏休みは8月中旬まで。日曜夕方のアニメで、小学生が夏休み最終日に宿題が終わってあらず大慌てするエピソードが放送される頃には、私の2学期はとくに始まっていた。2週間前の自分を思い出す内容にクスツとしつつ、夏休みに戻ればいいのにと何度思ったことだろう。

大学進学を機に上京して10年が経ったが、いまだに関東の暑さにはなれない。数年で慣れるだろうと思っていたが、見通しが甘かった。一日中じめじめとした暑さが身体にまとわりつくようだ。朝は玄関を開けた瞬間、ムアツとした熱気が押し寄せてくる。日中は日差しも強く、少し歩くだけで汗ばんでしまう。外に出るときはハンディタイプの扇風機が手放せない。夜も暑いままなので、エアコンは一晩中つけっぱなし。夏は電気代が恐ろしい。

地元は今夏真っ盛りだ。地元の天気予報を見ると、真夏日がよくあるらしい。私が小学生だった頃は、最高気温30度超えは珍しかった。ここ20年で最高気温は上がったようだ。しかし、やはり北海道の夏の暑さと関東の夏の暑さは違う気がする。カラッとしてさわやかな風が吹く北海道の夏が懐かしい。関東に何年住んでも、私は道産子のままだ。北海道の夏を思い出すたびに、毎日が楽しいことずくめだった小学生時代の夏休みに戻りたくなる。もし戻れたのなら、毎日何をして過ごそうか。考えるだけでわくわくが止まらない。ただ、今度こそ宿題だけは計画的にやらないと……。

(T.T)

